

2

描く

伊勢物語の絵画

例えば、思いのたけを和歌に託す登場人物や、主人公が旅する見たこともない遠い場所。『伊勢物語』の読者はどれほど興味をかきたてられたことだろうか。十一世紀初めに成立した『源氏物語』に伊勢物語絵巻の記述があり、『伊勢物語』は成立後まもなく絵画化され鑑賞されたと考えられる。しかし現存最古の遺品は鎌倉時代のもので、墨の繊細な線描を生かした白描^{はくびよう}絵巻断簡や、濃彩で描かれた装飾的な絵巻が伝わる。続く室町時代から桃山時代にかけては、場面選択や構図が共通する二つの系統の伊勢物語絵などが知られる。そして慶長十三年（一六〇八）、四十九図の絵入り豪華本「嵯峨本伊勢物語」が初めて出版という形で世に出た。以後、伊勢物語絵の享受層が大きく広がり、嵯峨本を踏襲した絵が大半を占めるようになってゆく。また、江戸時代には、俵屋宗達^{たわやそうたつ}、尾形光琳^{おがたこうりん}ら琳派の絵師たちも、おほかで気品ある伊勢物語絵の作品を多く制作した。

（大口裕子）

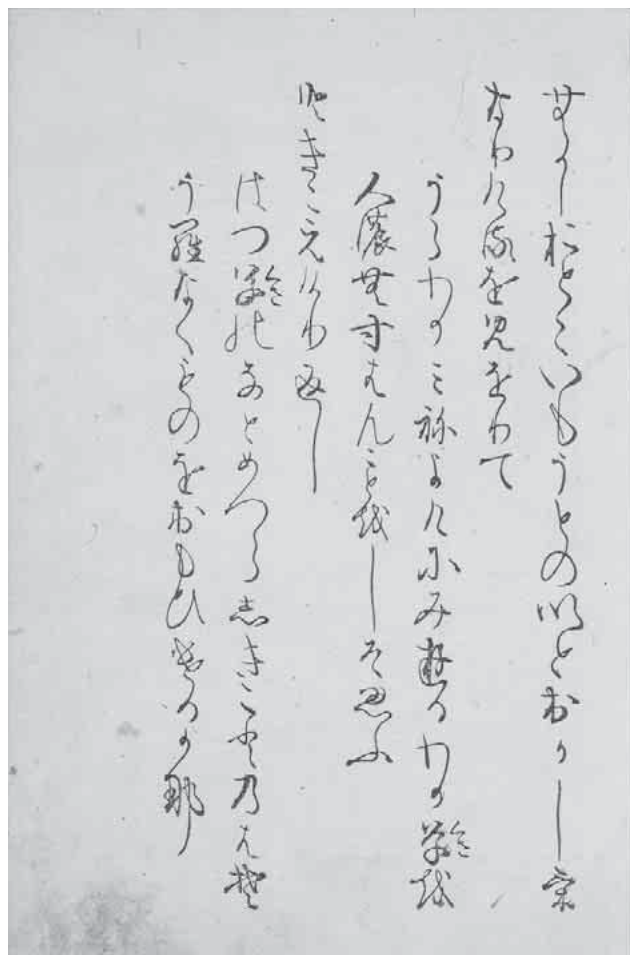
「九八一〇八五」〔江戸中期〕写
各一五六・〇×三五六・〇糶
六曲一双



『伊勢物語』の中心的な章段を含む四十五場面のうち、概ね右隻に前半の段、左隻に後半の段を描く。嵯峨本『伊勢物語』（一六〇八年）を踏襲しつつ、風俗画の要素や嵯峨本以外の図様も取り込む。なお、主人公の装束は三種に大別され、一瞥してそれと分かる。一つの水景に、例えば第七段「かへる波」と第九段「隅田川」を配して合理的な画面処理を行う一方、第九段「隅田川」の都鳥や第四十五段「ゆく蜩」の蜩など、重要なモチーフの欠如も見られる。臨終を描く第百二十五段「つひに行く道」がない点、場面を区切る雲や霞、地面に金が多用される点も総合し、豪商や町人層の慶事のため町絵師により描かれた可能性が考えられる。図録Ⅳ。

（大口）

「九八一四〇六」慶長十三年（一六〇八）刊
二六・〇×一八・六糶袋綴 大本一冊
（存巻下、取り合わせの上巻は覆刻整版本）



版本『伊勢物語』の嚆矢。角倉素庵（二五七一―一六三二）や本阿弥光悦（二五五八―一六三七）らによって製作された嵯峨本と呼ばれる豪華な木活字本の一つ。料紙もさまざまな色のものが用いられている。嵯峨本『伊勢物語』は複数回にわたって刊行されたが、これはその最初のもの。本文、絵ともに後続の版本の範となった。慶長十三年の奥書に「也足叟」（中院通勝）の自筆花押がある。挿絵四十九図は整版印刷で、構図の多くは室町時代制作とされる小野家本や大英図書館本に近い（ともに『伊勢物語絵本絵巻大成』所収）。図版に掲げたのは下巻冒頭の四十九段（若草）。ここを境目とする上下二分冊の形式も以降の版本で定着した。

（田村）

7

伊勢物語 嵯峨本第二種

「九八―五六二」

慶長一三年（一六〇八）刊

二六・八×一九・一 糶袋綴 大本二冊



川瀬一馬『増補古活字版の研究』によれば、本書は第二種本イ・ロ・ハ版のうち、イ版に属する。本文部分は第一種と異なる版面であるが、挿絵は第一種の板木を用いている。図版に掲げたのは十二段（盗人）の場面。業平は左手をかざして顔を隠す仕草を見せる。第二種本の挿絵は二十段（楓の紅葉）における匡郭左上部分が欠けていることが報告されている（高木浩明「古活字版伊勢物語の世界」、関口一美「伊勢物語の整版本」（共に山本登朗編『伊勢物語版本集成』竹林舎、二〇一一年所収）。鉄心斎文庫には第二種本イ版が上巻のみもう一部所蔵される「九八―四〇三」。下巻に第二種本ハ版を配した取り合わせ本で、富岡鉄斎旧蔵。図録1・16に掲載されているのはこちらの本である。

（田村）

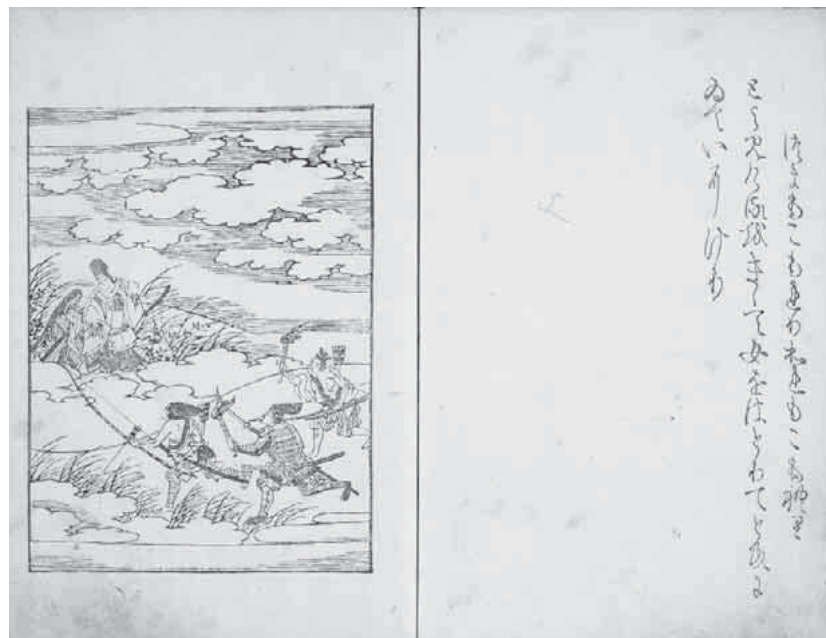
8

伊勢物語 嵯峨本第三種

「九八―五六二」

慶長一四年（一六〇九）刊

二六・九×一九・一 糶袋綴 大本二冊



構図も前例を踏襲しているものの、第二種本までと異なり業平が刀を持っていることが注目される。だが、顔を隠す仕草というこれまでの業平図のまま描き加えたために、右手は刀に手をかけながら左手は鞘も押さえずにただ高く掲げているといううちはぐな絵になっている。手で顔を隠すいかにも貴族らしい業平から、刀を手に戦おうと構える勇ましい業平への読みの転換が見られる点でも興味深い。ちなみに、真ん中の追手が右手に持つ長刀の柄の長さも第二種までとは異なり地面に届いている。掲出場面のほか、八十二段（渚の院）の挿絵では業平の前に置かれた箱に白抜きで紅葉の葉が描かれているのも第三種本・第四種本の特徴である。図録1。

（田村）

伊勢物語 嵯峨本第四種

「九八―五六九」
慶長一五年（二六一〇）刊
二六・七×一八・八 糧袋綴 大本二冊



川瀬一馬の分類によれば、本書は第四種本イ・ロ・ハ版のうち、ハ版に属する。『天理図書館善本叢書』の月報八（一九七三年一月）所載の芦澤新二「伊勢狂い」には、「板本では、嵯峨本の第一種、第二種、第三種があり、ごく最近第四種本も加えられ、別に古活字本が数点あるから一応の体は整っている」とある。挿絵についてはこれまでの嵯峨本、特に第三種本の絵を踏襲するものの、第三種までに比べて草花や松の幹などの描き方が雑になっていて、第三種本までとは絵の技術に差が見られる。関口一美は第四種本の挿絵の特徴として、八十七段（布引の滝）の滝の描き方を挙げ、中央下の部分に線が描かれていないことを指摘する。図録1。

（田村）

伊勢物語

覆刻整版
（ふくくせいばん）

「九八―四〇四」
〔江戸初期〕刊
二六・四×一八・六 糧袋綴 大本合一冊



下巻の挿絵のうち六図に彩色が施されている。嵯峨本を被せ彫りにしたもので、色変わりの料紙など嵯峨本によく似た作りの本も多い。整版『伊勢物語』の嚆矢。本書は奥書の一致などから慶長十三年刊行の第二種本イ版を覆刻したものとされるが、嵯峨本に見られる「也足叟」（中院通勝）の自筆花押は覆刻整版本にはない。また、図版の業平は帯刀しており、第三種本もしくは第四種本からの影響も考えられる。それらの当該場面比べて、本図は刀が曲がっているようにも見えるが、これは他と異なり刀が袖の上を通るという不自然な描き方をしたためである。覆刻整版本のみに見られ、嵯峨本と区別する簡単な指標となる。谷森善臣旧蔵。

（田村）

11

伊勢物語 奈良絵本

〔九八一・二二〕
〔寛文頃〕写
二三・三×一六・八種 列帖装三帖



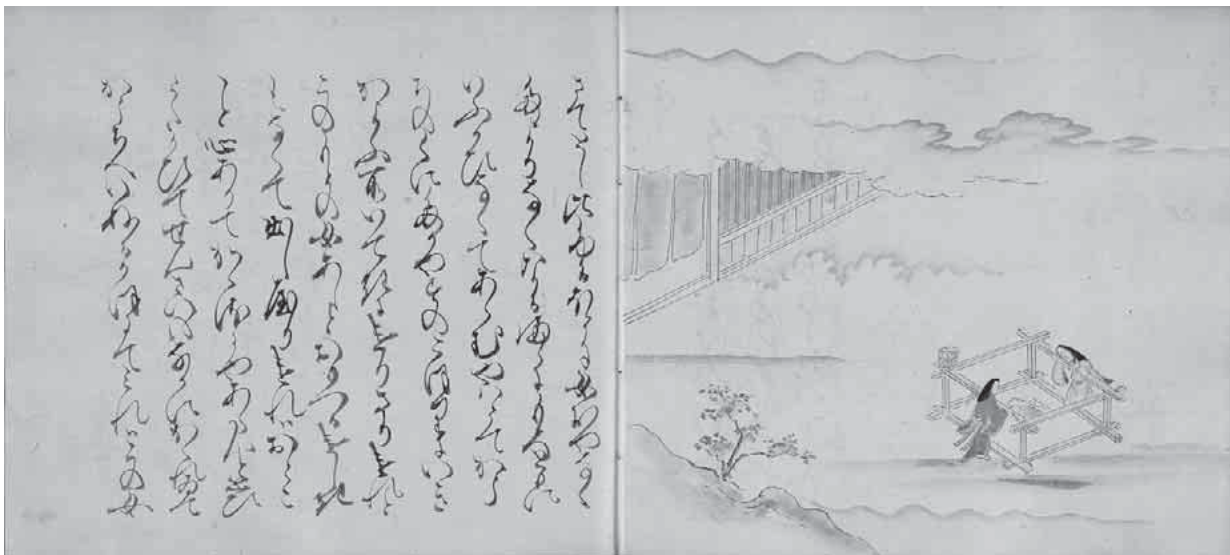
江戸前期、寛文・延宝（一六六一～八二）頃には奈良絵本・絵巻と呼ばれる極彩色の本が多く製作された。装訂や料紙も豪華で、嫁入り本・棚飾り本として用いられたと考えられる。『伊勢物語』に関しては多くの嵯峨本の影響下にあると見られ、本書もまた本文・挿絵ともに嵯峨本に極めて近い。版本に基づいて写本が製作される事例と言える。絵は第一冊に二十一図、第二冊に十四図、第三冊に十四図の計四十九図で、嵯峨本の挿絵の数と一致する。図版には嵯峨本各種と同じ場面を掲出したが、本書の挿絵は刀を持っており、少なくともこの挿絵に関するかぎり、嵯峨本の中でも特に第三種本以降の影響を受けていることが示唆される。図録12。

（田村）

12

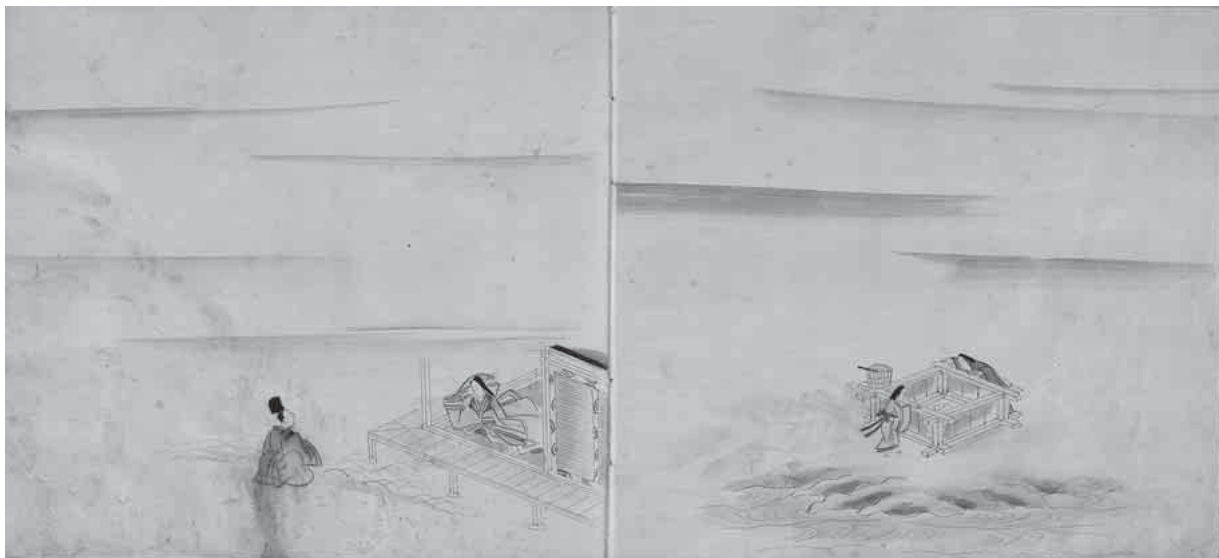
伊勢物語 葛岡宣慶筆

〔九八一・一〇四〕
〔江戸前期〕写
一六・六×一八・三種 列帖装一帖



江戸時代前期の歌人葛岡宣慶（一六二九～一七一七）による書写。奥書には、ある人の懇望により五月に書写を終えたことが記される。書写年は記載がない。宣慶が書き写した『伊勢物語』は数点現存しており、鉄心斎文庫には七点が備わる。そのうちの二点が絵入り本である。本書は淡彩三十九図の挿絵を持つ。嵯峨本など先行する絵入り版本の影響が見られるが、人物の数が減少し、描写もパターン化するなど、全体を通じて簡略な描写となっている。金地に花々や蝶を描いた見返しを持つなど、嫁入り本として仕立てられた可能性が高い。図録3。

（藤島）

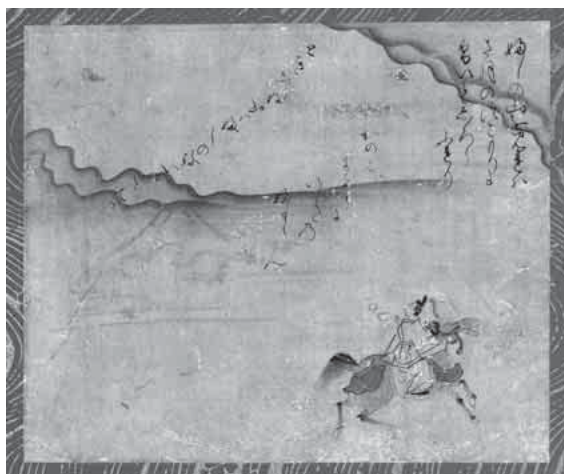


〔九八一—一〇二〕
〔江戸前期〕写

一五・九×一七・四 種 列帖装一帖

12と同じく葛岡宣慶の奥書を持つ絵入り本。三月上旬に書写したことを記す。本書は挿絵四十八図を本文と無関係に冊子のなかばにまとめて置くのが特徴。これは、冊子を作る際に、本文を書いた括り（紙を重ねて折ったもの）に絵の括りを挟みこんで綴じたためである。承応三年（一六五四）に京で刊行された瀟洒な絵入り本（小本二冊、山田市良兵衛版）と挿絵の数が一致するほか、構図にも共通点があり、影響関係をうかがわせる。挿絵を紙面の下方に配しているが、これは上方に文字を書くことを念頭に置いていることと思われる。（藤島綾「葛岡宣慶と伊勢物語」、国際シンポジウム「絵入り本と日本文化」〔絵入本ワークショップⅨ〕、二〇一六年十二月）。図録1。

（藤島）



〔九八一—三八二〕
〔江戸前期〕写

一九・〇×二二・五 種 折帖一帖



台紙の表に五紙、裏に六紙、合計十一紙を貼って画帖に仕立てたもの。紙の大きさは約一四・五×一七・二 糎。それぞれを八十七、九、四、八十一、五段／八十七、七十一、二十二、二十、二十三、九段の順に貼付する。各紙下方に絵を描き、上方に対応する文章を記し、同時に両方を鑑賞できる紙面となっている。文章はほぼ伊勢物語本文と一致するが、長くなる場合は要約している。ただし、どの場合も必ず和歌が書かれており、その字配りに工夫が見られるのが特徴である。絵はすべて構図が13の挿絵と似ており、共通の粉本（絵の手本）に基づいたものと推定される。

（藤島）

15 伊勢物語絵巻

〔九八一—一〇八〇〕
〔江戸中期〕写
二九・八×二六六・二 糧卷子装一軸

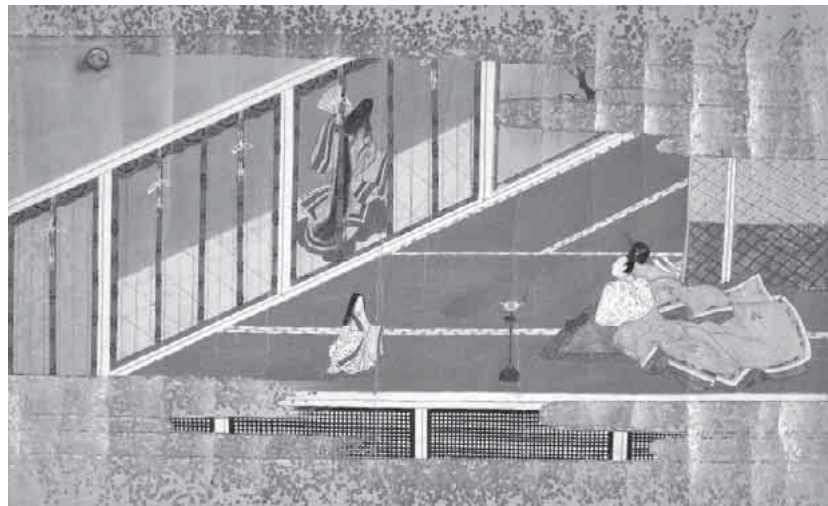


十二枚の縦長の画面を繋いだ絵巻で、上部に余白をとり、その場面の和歌を一首か二首散らし書きする。墨を主とする白描で、彩色は唇に朱を置く程度。モノトーンの画面に刷かれた金泥が潇洒な趣を添える。図様は嵯峨本と基本的に共通するが、人物の配置を変えたり景物を足す場合もある。人物表現には、岩佐又兵衛（一五七八—一六五〇）の豊頬長顎や躍動感ある画風の名残が認められる。場面は初段「春日の里」、第五段「関守」、第六段「芥川」、第九段「宇津の山」、同「富士の山」、同「隅田川」、第十二段「武蔵野」、第二十二段「千夜を一夜に」、第二十三段「筒井筒」、同「立田越え」、第五十段「行く水に数かく」、第百六段「龍田川」。図録19。

（大口）

16 伊勢物語絵巻

〔九八一—二四二二〕
〔江戸前期〕写
三〇・八×一一一・八 糧卷子装一軸



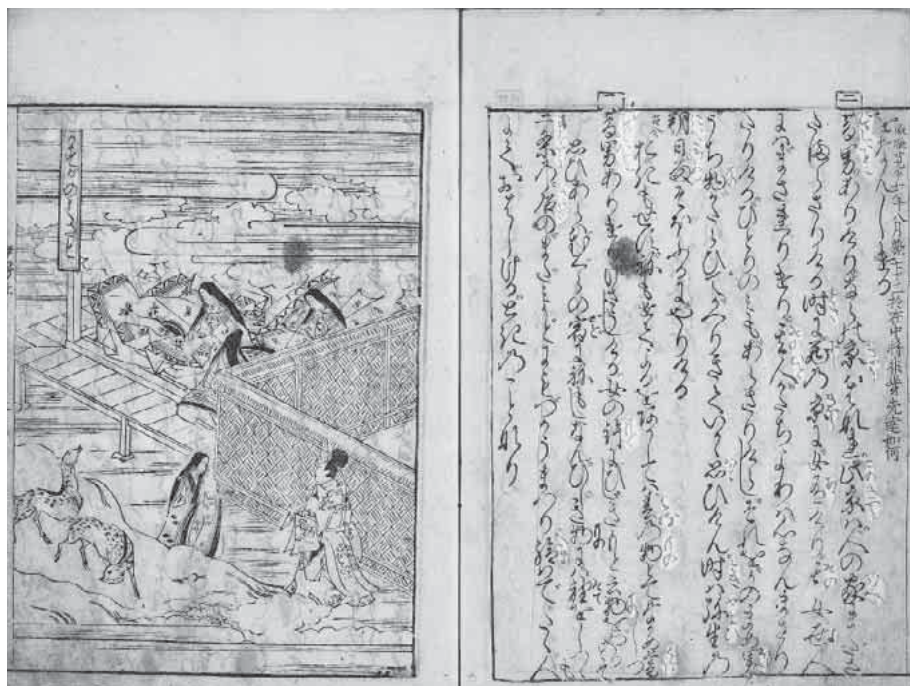
巻頭に「伊勢物語第四」の墨書があり、本来は五巻か六巻の絵巻と指摘されている。流麗な詞書は、第六十九段から第八十五段の途中までで、七段分の絵は最後を除き詞書該当部分の後にそれぞれ続く。内訳は、第六十九段「君や来し」、第七十一段「神の斎垣」、第八十段「衰へたる家の藤」、第八十一段「塩釜」、第八十二段「渚の院の桜」、第八十三段「小野の庵へ参る」。そして最後は第八十七段「布引の滝」と考えられる。濃彩で絵の上下に金の切箔を蒔く華やかな絵巻。嵯峨本の図様に則りながら、人物を演劇的に描き、第八十三段で水面を凍らせるなど、自然描写にも新味を出す。詞書料紙にも金銀泥の下絵が施される。図録19。

（大口）

「九八―四二〇」

寛文二年（一六六二）刊

二六・八×一八・三 種袋綴 大本二冊



上部に段序を表記し、和歌の頭に「万葉」「古今」などの出典を示すほか、行間に天福本の勘物（注記）を付すなど、明暦元年（一六五五）本に共通する。挿絵も嵯峨本の構図を踏襲しつつも、「かすがのみさと」「みかわの国八はし」など場所を注記する点や、上巻十四図、下巻十六図、計三十図に省略する点など、明暦元年本を受け継ぐ。朱の異本注記書入れあり。「寛文二年壬寅仲春下旬開板」の刊記があるが、版元は不明（いずれ京版か）。寛文二年本は何度も後印本が出るほど人気であったらしく、明治印本も知られる。図録2。（恋田）

「九八―五七四」

延宝七年（一六七九）刊

二七・一×一八・九 種袋綴 大本三冊



坂内山雲子編、菱川師宣画。坂内直頼（一六四六―一七一七）による伊勢物語の俗解書。延宝二年刊『頭書／新抄』伊勢物語の改題江戸版で、本文挿絵とも版木を新刻したもの。完存する原題簽「〔新／板〕伊勢物語頭書抄（絵入／読曲）上」もいかにも江戸版の面持ち。本文の刷りは極上。刊記「延宝七歳己未三月吉日／松会開板」の前には「絵師／菱川吉兵衛」と刻され、挿絵が菱川師宣（？）（一六九四）によることを明記してある点も注意される。大島雅太郎・小汀利得旧蔵。『伊勢物語版本集成』に影印を収載。本書には、刊年を削去した後印本があるほか、さらに本文挿絵とも版木を新刻した貞享二年刊『首書／新抄』伊勢物語があり、こちらは奥に「京絵師 吉田定吉」とあってかの吉田半兵衛の画事と知られる。図録2。（神作）

「九八―四五三」

元禄一〇年（二六九七）刊

二六・六×一九・〇 糶袋綴 大本三冊



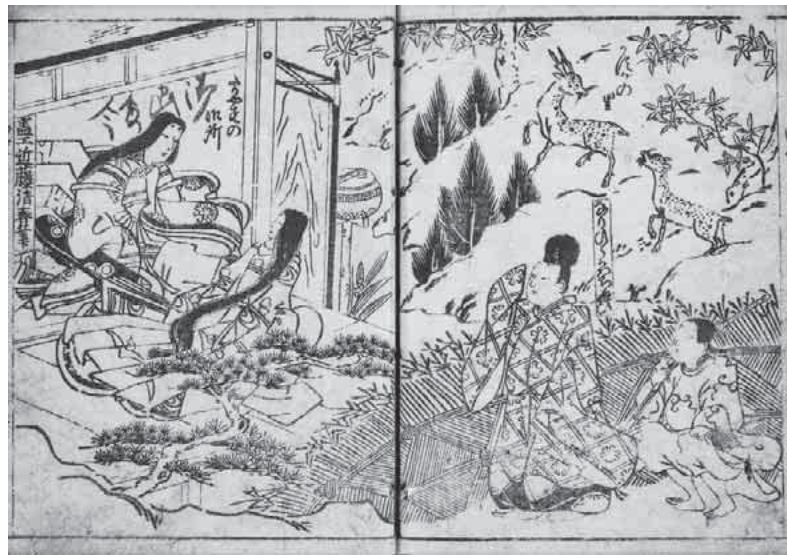
苗村松軒編、絵師未詳〔吉田半兵衛風〕。松軒は、元禄六年刊『頭／書』百人一首絵抄（吉田半兵衛画、未見）も編むというが、伝未詳。ちなみに、近江国蒲生郡苗村（現滋賀県竜王町）を本貫とし、『徒然草絵抄』（元禄四年刊）、『伊勢物語絵抄』（元禄六年刊）などをものした仮名字作者の苗村丈伯（生没年未詳、彦根藩儒医）は別人と思しい（『日本古典文学大辞典』「苗村丈伯」（市古夏生執筆）。原題簽「伊勢物語大成（百人一首絵抄／三十六哥仙／六歌仙并二評）上（中・下）」完存。刊記「元禄十歳丑五月吉祥日／洛陽書堂／吉田三郎兵衛／浅見吉兵衛／山口茂兵衛」。版面は、伊勢物語の本文（傍注付き）と挿絵を主とし、上段には百人一首ほかの絵抄を載せて賑やか。図録2。

（神作）

「九八―五四三」

享保一四年（一七二九）刊

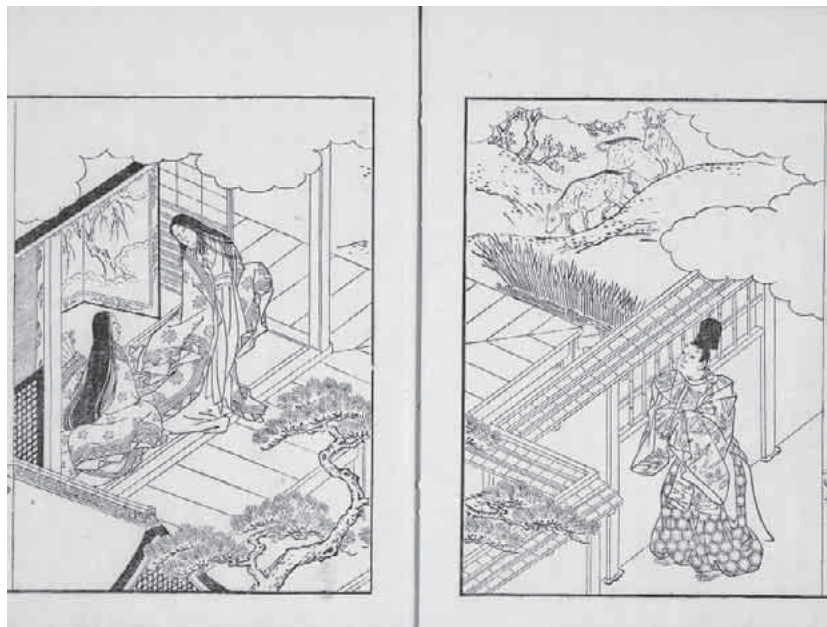
一八・一×一二・八 糶袋綴 中本一冊



浄瑠璃の六段本（浄瑠璃は多くが六段構成で、そのセリフや語りを収めた絵入本は六段本と呼ばれた）を模した本。本文は細字でわずか十九丁半にびつしりと詰め込まれ、絵は本文から離れて四つの見開きに、それぞれ異なる章段の場面をまとめる。例えば最初の絵は、一段の「春日の里」を背景に二十三段の「河内越」を同一構図中に描き、画中に「かすかの里」「なりひらかはち通ひ」など、場面や人物名を注記する。同見開き左端に「画工近藤清春筆」とある。清春（生没年未詳）は宝永／享保年間の活動が知られる初期浮世絵版面の絵師で、他に地誌、地図の編纂を手がけ、赤本の作例も多い。その絵は鳥居派の画風を示すが、画系は不明。江戸：うろこかたや版。図録2。

（谷川）

「九八―四九四」
延享四年（一七四七）刊
二八・二×一九・五 糧袋綴 大本二冊



「延享四丁卯歳暮／書林／寺町通二条下ル町／吉野屋藤兵衛版」の原刊記な
らびに、同年夏林鐘望月の跋^ばを具備し、なお同年菊月の竹川藤兵衛・柏原屋
清右衛門・吉野家藤兵衛三肆の奥付を持つ。絵師の西川祐信^{にしかわすけのぶ}（一六七一―
一七五〇）は京都で活躍し、版本と肉筆画の両面で人気を博した上方浮世絵の
第一人者。古典文学を題材にした版本の挿絵を当世風に描くことで祐信が古典
の大衆化に果たした役割は大きい。本書でも人物のポーズと表情は浮世絵を思
わせ、特に女性の立ち姿は即座に美人図を想起させる。挿絵は対応する本文と
離れて位置し、絵としての独立性が高い。祐信人気は死後も衰えずその絵本類
は版を重ね、上方・江戸を問わず多くの絵師に影響を与えた。図録1。（谷川）

「九八―五〇六」
宝暦六年（一七五六）刊
二六・七×一八・七 糧袋綴 大本二冊



奥にある「画工 月岡丹下^{つきおかたんげ}」は大坂の浮世絵師・月岡雪鼎^{せつてい}（一七二六―八六）
のこと。肉筆美人画で人気を得たが、画業の初期には西川祐信の後継者とし
て祐信風の版本を手がけた。本書にもその傾向が明らかな一方、独自の図様
も注目される。第百六段「竜田川」では、一般に男はくつろいだ狩衣姿^{かりぎぬ}に描
かれる。ところが本書では正装した武官の姿で、これは『百人一首^{かせん}』などで「ち
はやぶる」の一首に添えて描かれる、当時よく知られた歌仙業平^{かせん}の図像であ
る（山本登朗『伊勢物語版本の世界』『伊勢物語版本集成』竹林舎、二〇一
一年）。和歌を介して『伊勢物語』と歌仙絵の図様が重なるおもしろさが意図さ
れたのであろう。大坂・柏原屋与左衛門版。図録1。（谷川）

「九八一五二」

明和四年（一七六七）刊

二五・九×一八・二種袋綴 大本二冊



卷末の刊記によれば、文字の版下および挿絵は下河辺拾水（生没年未詳）による。明和から寛政（一七六四～一八〇二）頃京都での活躍が知られる。滑稽本、狂歌本、往来物など様々な版本の挿絵を手がけ、特に武者絵に優れた。西川祐信風の美人を描くが、師弟関係は不明。十八世紀以降の『伊勢物語』版本挿絵はそれまでに比べ人物を大きく描く傾向にあるが、本書の絵は特に視点を近くとって、物語に関わる景物の描写を最小限に抑え、人物を表情豊かに描く。第二十三段「河内越」は、女の浮気を疑い、出かけると偽り隠れてのぞき見る男を描く。通常左に描かれる女は大胆にトリミングされ、自分を思っ待つ女を見た男の意外そうな表情が印象的である。大坂・海部屋勘兵衛版。図録1。（谷川）

「九八一五二」

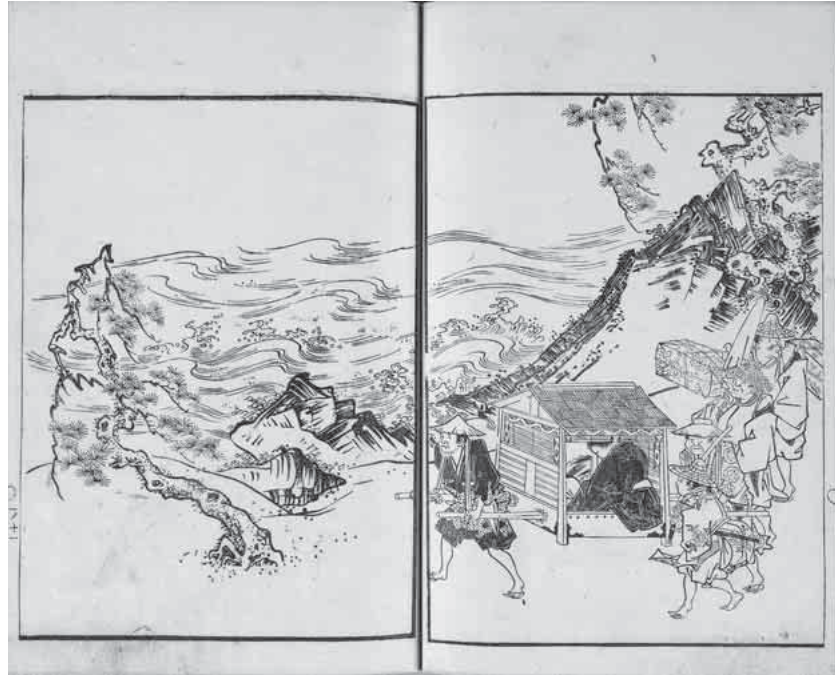
天明七年（一七八七）刊

二五・五×一八・八種袋綴 大本二冊



同時期の『伊勢物語』版本には浮世絵師による当世風の挿絵が多い中で、本作は画面に引かれた霞、引目鉤鼻の面貌など、古風な特徴を見せる。静的な人物の描写や視点を引いた構図は一見嵯峨本を思わせるが、十八図ある絵の場面選択や図様には、嵯峨本との差異が目立つ。刊記にある「画工 土佐家門人」については未詳だが、場面選択や図様は先行する土佐・住吉派作例に通じ、この絵師が土佐派系統の粉本に接した可能性はあるだろう。例えば九段「富士の山」で武官風の装束をつけて立つ男の図様は珍しく（多くは騎乗姿）、これは土佐光茂筆とされる鉄心斎文庫旧蔵の画帖や、住吉如慶作例と共に通ずる。京都・山田屋卯兵衛、黄錦屋義助版。図録16。（谷川）

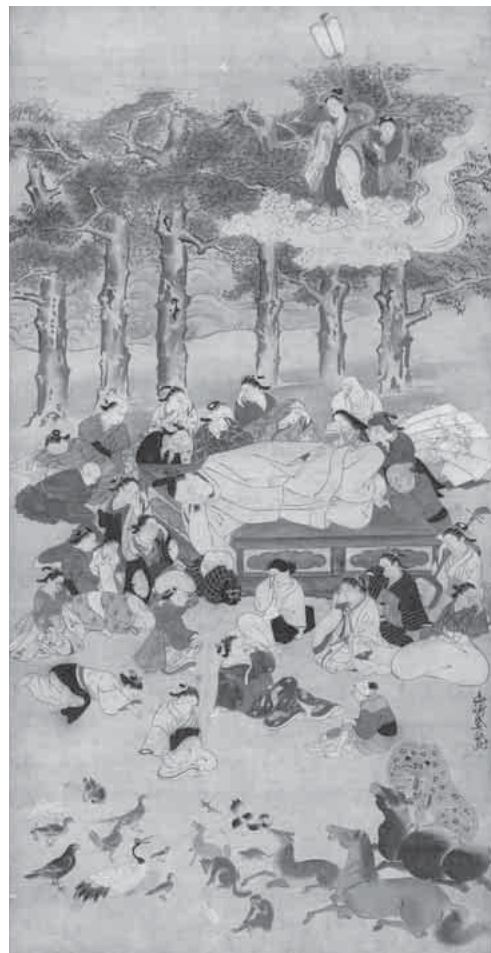
「九八一—九一二」
 文政八年（一八二五）刊
 二六・〇×一八・二 種袋綴 大本三冊



市岡猛彦校、法橋玉山画。伊勢物語版本のなかで挿絵の数が最も多い本。挿絵百四十図は、伝統的な伊勢物語絵に基づくもの、物語に拠って場面を新たに描いたもの、和歌の内容を図示したものなど多様な描写を持つ。絵師については序文に「名にたかき難波人法橋玉山」とあり、岡田玉山（？—一八〇八）か。本文を対校して頭注を加えた市岡猛彦（一七八一？—一八二七）は尾張藩士。国学を本居宣長・春庭に学び、尾張鈴屋学派の中心的存在だった。文政六年に序を記し、文政八年に江戸・大坂・京・名古屋の書肆六肆より刊行された。これが江戸時代最後の伊勢物語絵入り本の刊行となった。図録2。

（藤島）

「九八一—一〇八四」
 「江戸中期」写
 七四・一×三七・四 種軸装 一幅



在原業平の死を釈迦の涅槃に見立てた肉筆浮世絵。絹本着色。法然や日蓮、芭蕉や歌舞伎役者など高僧や著名人を釈迦に置き換え、江戸時代に盛行した「変わり涅槃図」のひとつ（信多純一「変わり涅槃図考」『にせ物語絵—絵と文・文と絵—』平凡社、一九九五年）。「山崎氏龍女図」の落款から、山崎龍女（生没年未詳）の筆と判断される。構図や描写などは英一蝶（一六五二—一七二四）筆「業平涅槃図」と共通し、直接参考にしたと思われるが、一蝶の図像を反転させたり、女性や動物を増やすなど龍女独自の工夫も見える。附属の木箱に山東京伝と京山の享和元年（一八〇一）の箱書があり、この絵を享保（一七一六—三六）初めの作と推定している。龍女は旗本同心山崎文右衛門の娘で、女性浮世絵師として享保期に活躍した。岸田劉生旧蔵。図録Ⅳ。

（恋田）